

令和3年度岩手県スモン患者検診結果

千田 圭二（国立病院機構岩手病院脳神経内科）
豎山 真規（国立病院機構岩手病院脳神経内科）
佐々 知恵（国立病院機構岩手病院看護部）
鳥畑 桃子（国立病院機構岩手病院地域医療連携室）
竹越 友則（国立病院機構岩手病院地域医療連携室）
小山内綾乃（国立病院機構岩手病院リハビリテーション科）

研究要旨

岩手県在住のスモン患者13名の内、5名の訪問検診と電話での聞き取りをできた5名を合わせた10名（男性2名 女性8名）の身体的精神的状況、社会的状況を調査検討した。患者の年齢は68歳から96歳（平均81.8歳）であった。歩行状態は独歩3名、一本杖で可能1名、歩行器3名、車いすおよび不能が2名であった。下肢の振動覚障害は軽度3名、高度3名であり、異常知覚は高度4名、中等度2名、軽度1名、評価不能・その他3名であった。胃腸症状について、なし2名、あるが気にならない1名、軽いが気になる1名、ひどく悩んでいる4名、評価不能など2名で、半数で下痢あるいは便秘に悩まされていた。身体的併発症は全員で認められ、白内障8名、腰痛などの脊椎疾患が5名、膝をはじめとした四肢関節疾患5名であった。8名が過去1年間に転倒していた。精神症候は全員で認められ、不安焦燥2名、抑うつ3名、記憶力の低下8名（80%）であり、明らかな認知症は1名で認められた。診察時の障害度は軽度2名、中等度3名、重度4名、極めて重度1名で、障害要因はスモンによる障害に併発症が加わったためが7名（70%）であった。加齢と併発症による運動機能の低下、精神症候の増加により、日常生活動作の障害が進行し、介護の必要性が増大してきていると考えられた。

A. 研究目的

岩手県在住のスモン患者の現在の身体的、精神的、社会的状況を明らかにする。

B. 研究方法

岩手県内に在住するスモン患者の検診を行い、「スモン現状調査個人票」「ADLおよび介護に関する現状調査」の結果を集計し分析した。研究に際して、プライバシーの保護に留意し、個人名、住所などの情報は含めなかった。スモン現状調査個人票を研究利用することに関して同意を得た。

C. 研究結果

1. 検診方法

岩手県在住のスモン患者は13名（男性2人、女性11人）であった。会場検診は新型コロナウイルス感染症蔓延のため、行わなかった。医師、看護師、理学療法士、医療社会福祉士による多職種チームでの自宅あるいは施設への訪問検診を同意の得られた5名に行った。本年度の訪問検診は1日間でおこない、県南の地域を訪問した（図1）。訪問検診は事前に希望日をアンケートで聞いたうえで、予定を合わせて訪問する方法をとり、全例で1回の訪問で行うことができた。検診を希望しなかった8名には医療福祉士が電話で聴取を行い、

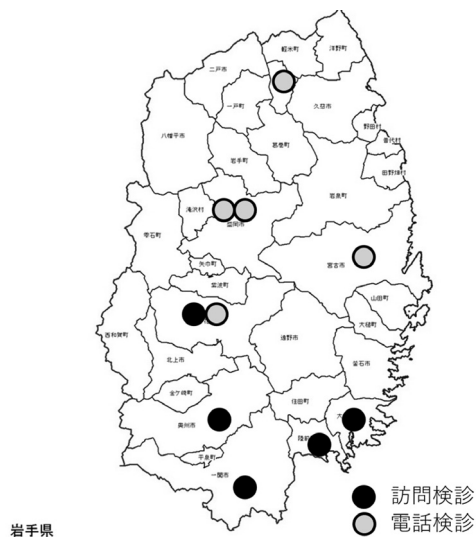


図1 患者の居住地と検診場所

5名から協力が得られた。訪問による対面検診と電話での聞き取りをおこなった10名で検討した。

2. 身体の状態

男性2名、女性8名、年齢は69歳～90歳（平均年齢81.3歳）、発症年齢は11歳～35歳で、罹病期間51年～61年（平均55.3年）、BMIは7名で検討し17.6～23.7（平均20.4）であった。

視力について新聞は読める3名、大見出しは読める6名で、老眼（7名）、白内障（8名）の合併が多く認められた。

歩行状態は独歩3名、一本杖で可能1名、歩行器3名、車いすおよび不能が2名であった。外出は遠くまで可能1名、近所まで可能2名、介助で可能6名、不能1名であった。6割の患者は歩行器あるいは車いすを要し、外出には介助を要した。知覚障害については、下肢の振動覚障害は軽度3名、高度3名であり、異常知覚は高度4名、中等度2名、軽度1名、評価不能・その他3名であった。半数以上で中等度以上の異常知覚を有していた。胃腸症状について、なし2名、あるが気にならない1名、軽いが気になる1名、ひどく悩んでいる4名、評価不能など2名で、半数で下痢あるいは便秘に悩まされていた。時々下痢2名、時々便秘2名、常に便秘3名であった。

身体的併発症は全員で認められ、白内障8名、腰痛

などの脊椎疾患が5名、膝をはじめとした四肢関節疾患5名であった。8名が過去1年間に転倒していた。その他の併発症では、狭心症、糖尿病、高血圧症、高脂血症、不整脈、脳血管障害、悪性腫瘍（前立腺がん）、逆流性食道炎、潰瘍性大腸炎、難聴、加齢性黄斑変性症が認められた。

精神症候は全員で認められ、不安焦燥2名、抑うつ3名、記憶力の低下8名（80%）であり、明らかな認知症は1名で認められた。睡眠の状態では、普通2名、時々不眠2名、常に不眠5名であった。

診察時の障害度は軽度2名、中等度3名、重度4名、極めて重度1名で、障害要因はスモンによる障害に併発症が加わったため7名（70%）であった。

3. ADLおよび介護に関する現状

測定できた8名でのBarthel Indexは95点以上が1名、75点から90点が3名、70点以下が4名であった。

生活場所は自宅7名、そのうち4名は独居、施設が3名であった。介護の状況は介護不要4名、必要な時に介護が2名、毎日介護が3名、必要だが介護者がいないが1名で、6名が何らかの介護を要していた。介護認定は未申請3名、要支援1名、要支援2名、要介護2名、要介護3名、要介護4名であった。

生活の満足度はどちらかといえば満足が4名、何とも言えない1名、どちらかといえば不満3名、不満1名であった。

不安を感じていることとして、「施設での支払いが不安で自宅に戻りたいが独居で困難である」「ストマのため、デイサービスの利用を控えている。施設入所を希望しているが経済的に困難」「自宅が山奥であり、福祉サービスが十分受けられるか心配」「膝関節の痛みがひどく、移動が困難になった」など、身体状況の悪化に加えて、経済的な問題などで十分な介護が受けられない不安が寄せられた。また新型コロナウイルス感染症蔓延の影響で「電話診療のみで2年位病院に通院できていない」という不安も聞かれた。一方「独居であるが、介護サービスはうけたくないと言っている（他県に住む娘さんは勧めるがご本人が申請を拒否されている）」という家族からの不安も聞かれた。

D. 考察

本年度の結果と2002年の検診結果を比較した¹⁾。2002年18名の平均年齢は70.9歳、2021年度10名は81.3歳であり、杖歩行以上の歩行能力を有しているのは2002年90%、2021年40%、介護認定を受けているのは2002年33%、2021年70%、介護を必要としているのは2002年16%、2021年66%であった。生活の満足度で満足あるいはどちらかといえば満足が2002年61.5%から2021年40%に低下していた。併発症では白内障が2002年61.1%、2021年80%に、記憶力低下(自覚や不安、あるいは認知症を発症している患者を含む)が2002年27.8%、2021年80%に増加していた。20年間で、スモン後遺症に加えて、加齢に伴い運動能力、日常生活能力が低下し、介護を要する患者の割合が増加していた。今後も、さらに介護の必要性が増してくると考えられる。

本年度は新型コロナウイルス感染症蔓延の影響で会場検診は行うことができなかった。年々会場検診に来場可能な患者は減少してきており、コロナ禍が収束した後も、対面検診は訪問でおこなうことが主流になると考えられる。また訪問検診も負担に感じる患者も増えてきていることから、負担をへらす工夫や検診時に不安を聞き取り、情報提供するなどの患者にとっての付加価値を高める工夫がより必要になってきている。

患者からの聞き取りでは介護費用についての不安がきかれた。高齢化したSMON患者の介護費用について、救済する制度の検討も必要と思われる。

E. 結論

SMONの後遺症に加えて、加齢と併発症による運動機能の低下が進行し、介護の必要性がましてきており、継続的な支援が必要である。コロナ禍により検診の困難さが増しているが、聞き取りなどの工夫で実態を把握して、適切な支援につなげることができるように努めていきたい。

G. 研究発表

なし

H. 知的財産権の出願

なし

I. 文献

- 1) 千田圭二 阿部憲男 大井清文：スモン検診からみた岩手県におけるスモン患者の医療・福祉の現状と問題点. 医療 2006: 59 (1): 3-8